

壺井栄文学館訪問記

チロ基金・日本文化情報センター代表

辰巳 雅子

壺井栄ロシア語訳作品集『二十四の瞳』を出版して以来、各地の図書館に寄贈する活動を続けてきた。ベラルーシ国内では首都ミンスクをはじめ九都市の図書館施設に寄贈できたが、ロシアによるウクライナ侵攻の影響のため、ロシア語に翻訳したにも関わらずロシア国内の図書館に寄贈できなかったことは残念である。一方でキルギス日本センターとノルウェー国立図書館に寄贈できたことは光栄なことだった。また日本国内では国会図書館に加えて、東京都立多摩図書館、北海道立図書館、静岡大学図書館にも寄贈できる運びとなった。そして今年の八月に小豆島の壺井栄文学館に寄贈する夢が叶った。

本書第二版に当たるミンスク版の出版費用寄付者の一人である父と二十五人の翻訳者のうち二名とともに壺井栄文学館を訪問することができた。ミンスク版二冊を二十四の瞳映画村の有本裕幸専務理事と壺井栄文学館の大石雅章館長に手渡ししたとき、これまで支えてくれた多くの人たちとの約束が果たせた気持ちになった。

二十四の瞳映画村内にある壺井栄文学館では直筆原稿や『二十四の瞳』初版本などが多数展示されており、また作家の愛用の品が大切に保存されている。村内にはロケに使われた学校校舎など施設がそろい『二十四の瞳』の世界と時代背景を体感できる。そして村内のブックカフェ書肆海風堂には六カ国語に翻訳された『二十四の瞳』が揃っているが、そこへロシア語訳も仲間入りできた。今回訪問したときには二〇二一年に仙台で出版されたロシア語訳『二十四の瞳』がすでに展示されていた。大

切に保管、閲覧されていることは翻訳者冥利に尽きる。ロシア語で『二十四の瞳』を読む人が大勢小豆島を訪れるとは思えないが、多くの言語に翻訳されていることそのものが壺井栄文学の世界への広がりを表していると言える。

水源地三号にも寄稿され、この仙台版を自らの手で製本してくださいと赤間悟さんは昨年、奇しくもチェルノブイリ原発事故が起きた日付と同じ日に逝去され、ミンスク版の完成をお見せすることができず残念だった。長年製本業に携わってきた赤間悟さんが人生最後に手掛けた本が壺井栄『二十四の瞳』のロシア語訳になり、それが小豆島のブックカフェで多くの人の目に触れることになったことに運命を感じざるを得ない。今回ロシア語版『二十四の瞳』を寄贈できてよかった。聖地に大切な物をお供えしてきたような気持ちになった。

二〇一七年から弊センターの日本語教室の生徒たちと中断しながらも続けてきた翻訳作業。そして出版、ようやく壺井栄文学館に寄贈するまでの道のりは長かった。振り返れば時の流れはあつと言っただけでしょうと言う人も多いと思うが、コロナ禍、ベラルーシの政情不安、隣国の戦争の中での作業は長く感じた。しかし、青い瀬戸内海と小豆島の上に広がる透き通った空を見たときに今までの苦労が洗われた。二泊三日の小豆島滞在は本当に短く感じられた。

実際に小豆島に上陸すると、その海岸線は想像以上に入り組んでおり、『二十四の瞳』の主人公、大石先生が自転車で岬の学校へ通うときの気

持ちをようやく理解できたと思う。翻訳をする前に翻訳者はその土地に実際に行って、その景色を見て、風に吹かれ、自分の足で歩くという体験をしてから翻訳するほうがより良い翻訳ができるかもしれない。しかし実際問題として二十五人のベラルーシ人を小豆島へ連れて行くのは至難の業だ。そんな中、二人だけだがともに小豆島へ行くことができたのは大きな喜びだった。

今回その一人、アール・ラゼルコさんが担当した壺井栄の作品『坂道』と『妙貞さんのハギの花』の二作を「水源地」第五号に掲載する承諾を得たのでご紹介したい。

『坂道』は第二回芸術選奨文部大臣賞を受賞し、いわゆる「職業に貴賤なし」を主張する作品だ。小学生のときにこの作品を読んだ私も差別は良くないことだと読後に感じたのだが、今読み返すと、戦後間もない日本社会の様相、そして孤児になった人物を取り巻く人間関係を描いている点により意識がゆくようになってしまった。ここ二年ほどで戦争孤児の数が増えてしまったこの世界である。

『妙貞さんのハギの花』は、子どもときから個人的に大好きな作品で、これも職業差別やいじめ問題がテーマになっているが、作中作品である妙貞さんの伝説が大変印象深い。この妙貞さんは小豆島に実在した人物、妙光尼を壺井栄がモデルにしているということは、もちろん子どもたちには知らず、翻訳作業をしているときにネット検索をしていて偶然知ったことである。壺井栄文学をロシア語に翻訳しなかったら、一生知ることなかっただろう。小豆島へ行くこともなかっただろう。

この度、また新たに壺井栄の作品ロシア語訳を編集部の御厚意により「水源地」に掲載できることとなった。インターネットを通して、より多くのロシア語読者に読んでいただきたい。それが翻訳者の心からの願

いだ。



